



マラーと書物

渡辺美奈子

(文学博士・ドイツ文学 横浜薬科大学講師) Minako Watanabe

マラーの良き理解者であったナターリエ・パウアー＝レヒナーの記した『グスタフ・マラーの思い出』によれば、ふたりが共に散歩し、何軒かの小さくて粗末な農家の傍らを通り過ぎた時、マラーは次のように言った。「ほら、僕はこのような貧相な家で生まれたんだ。窓にはガラスさえはまっていなかった。家の前には大きな沼が広がっていた。カリシュトという寒村と壊れかけた小屋が二、三軒、これが近くにあるすべてだった。僕の父は、あらゆる仕事を経験し、常に上をめざして非常に精力的に働いてきた。父は最初御者になったが、馬を駆り馬車を走らせながら、さまざまな本を読んで勉強した。そのため、〈御者台の学者さん〉とのあだ名を頂戴していた。「あだ名」は原文では„Spotname“でSpott(からかい)のName(名前)の表現であるから、そこには身分不相応な教養の持ち主としての、父親に対する皮肉も含まれている。

父ベルンハルトと母マリーは1857年に結婚し、マリーの持参金3500グルデンをもとにカリシュトに家を買うことができ、そこでマラーは1860年7月7日に生まれた。父ベルンハルトも祖父も酒造業を営んでいたが、酒で商売をすることはキリスト教徒を酒の力で墮落させるためである、というような濡れ衣がユダヤ人に着せられる時代にあっては、祖母が営んでいた織物行商の方がまだ家計を支える力になったようである。

馬車での配達という仕事で家業を手伝っていた父は、「常に上をめざして精力的に働き」、つましい生活から始め、ついにひとかどの地位を手に入れた。1860年イーグラウに移住し、酒の製造と販売、後には居酒屋の営業許可もとり、たまに危ない橋も渡ったとしても成功者になったのである。1872年に彼は、カリシュトの時のおよそ3倍の値段で、広い中庭付きの家を購入した。1860年以来、ユダヤ人も10年間ひとつの地域に住めば市民権を得ることが許されていた。定住するにはむろんそれなりの経済的な基盤に裏打ちされていなければならないが、父ベルンハルトは、自分も十分その資格があると思い、多額の手数料

を支払い、申請し、受理された。

ボヘミアやモラヴィアのユダヤ人は、上をめざして努力し、市民として社会的な地位を確立すると、その多くが書籍を購入し、居間に据えられた書籍棚を飾ることに熱心だった。ドイツ古典主義の作家ゲーテやシラーのみならず、彼らの「同胞」ハイネなどの作品がその中心であった。宗教的な同化はさておき、文化的な同化にいそしみ、子の教育に力を注ぐ者も多かった。わが国でも、経済的な向上が、教養へ欲求へと結びついた時代があったことを懐かしく思い出す方もいるだろう。文学全集や百科事典が家庭の本棚を占め、ピアノが売れた頃である。

マーラーの父バルンハルトもそのような「教養」への渴望を持っており、書庫には、ちょっとした図書館ほどの蔵書があったという。マーラーの思い出の中で、両親は「火と水の関係（水と油のドイツ語的表現）」であり、生涯を通して愛情を吐露していた母親と比較して、けだものないし粗暴な暴君としての役回りばかりを与えられている父親だが、父親による教育への熱意がなかったら、芸術家マーラーも誕生しなかったであろう。マーラーは、父親から何よりも「本の虫」としての性格と「向上心」を受け継いだ。本を「ともに歩むことができる唯一の友」であり「真の兄弟であり、父たちであり、恋人たち」とであると友人に手紙で語ったように、生涯を通して並外れた読書好きは変わらなかった。

バウアー＝レヒナーは、マーラーの子どもの頃のエピソードを紹介している。「ある日、小さなグスタフが指にひどい怪我をして何時間も泣き叫び、どうしても落ち着かせることができなかった時、父親は『ドン・キホーテ』を読むよう、彼のところに本を持っていた。すると突然、グスタフが部屋ですごい勢いで笑うのが聞こえたので、両親は気が狂ったのかと思い、慌てて息子の部屋に走っていった。しかし息子は、ただドン・キホーテの冒険にとっても夢中になって、現実の激痛を忘れてしまったのである」。アルマによれば、後にマーラーは、アルマが陣痛に苦しんだ時、難解なカントの書を朗読して痛みを和らげようとしたという。妻にも自分と同様の効果を期待したのであろうか。

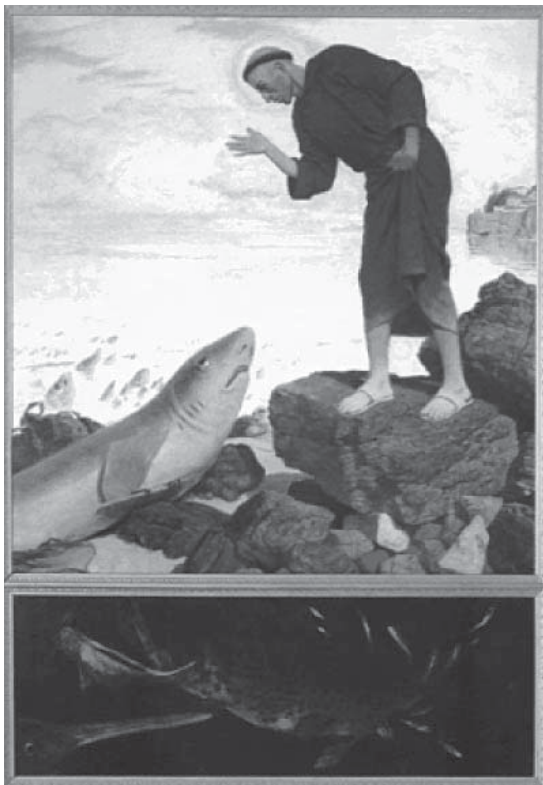
経済的に余裕のない学生の頃、マーラーはねだったり借りたり、とにかくいろいろなやりかたで本の調達を試みたようだ。自由に本が手に入るようになってからは、ゲーテ、ヘルダーリン、E.T.A.ホフマン、ジャン・パウルなどのドイツ古典主義やロマン派作品他、ギリシア悲劇、ドストエフスキーをはじめとするロシア文学、ディケンズやロレンス・スターンなどのイギリス文学やスペイン文学などの外国文学、数は少ないが同時代の文学作品、さらにはカントやショーペンハウアーやニーチェなどの哲学書や自然科学に関するものも読んでいた。マーラーと交友があった大指揮者にしてピアニストのハンス・フォン・ビューローもベルリオーズ、ワーグナー、ブゾーニとともに読書家と

して知られるのだが、彼らと同様マーラーは、御者台の上ならぬ馬車や汽車の中でも熱心に読書に耽っていたことであろう。アルマが1938年に財産の大半を残して急遽アメリカへの亡命を余儀なくされた時、これらの書籍が失われてしまったのは、とても残念なことである。

しかし豊富な読書量にも関わらず、歌曲作品においては、大詩人の詩に直接作曲したものがほとんどない。「音楽家が完璧に美しい詩に作曲しよう試みるのは、野蛮行為とは思えない。それはまるで彫刻の大家が大

理石の立像を彫りあげ、その辺の絵描きがそれに色を塗ろうとするようなものだ。だから自分は『少年の魔法の角笛』からほんの少し頂戴するにとどめた。(中略)それは完成された詩ではなく、だれも自分のものを掘り出せる岩の塊なのだ」。

マーラーの場合、歌曲と交響曲の境界線が特殊であり、ピアノ伴奏版、管弦楽伴奏版、交響曲の中に組み込まれた歌曲等、その成立からして込み入っている。歌曲と交響曲が、ほとんど同時進行的に存在している場合もあり、それは初期の交響曲が、「角笛交響曲」と呼ばれているゆえんでもある。シューベルトやブラームスなど他の有名な歌曲作曲家とは異なる、ユニークな点といえよう。たとえば、空虚な行為の象徴である「魚に説教するパドゥアの聖アントニウス」は第2交響曲のスケルツォに成長した。交響曲第3番の第1楽章は、悲惨な「死んだ少年鼓手」のための「純然たるリズムの習作」にすぎず、マーラーは「もしこの習作がなかったら、この歌曲を作曲できなかっただろう」と述べている。マーラーにおいて書物は、歌曲のテキストとしてだけでなく、少年時代の体験とともに、音楽作品そのもの、すなわち彼の世界観の形成に、はかりしれない影響を与えているのだ。



ベックリン「魚に説教するパドゥアの聖アントニウス」1892